

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 38 回 演説の力が築く未来の世界

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

埼玉県の県庁所在地代表駅である、さいたま市の JR 浦和駅から徒歩 10 分の所にあるコンサートホール「埼玉会館」大ホールに 11 月 6 日昼、何百人もの若い外国人が賑やかに集まっていました。「第 24 回 語学留学生による日本語弁論大会」が開催され、関東甲信越地区などの日本語学校から 12 カ国 15 人の留学生が、日本での留学経験を踏まえ、日本社会で思うこと、将来日本や自分が生まれ育った国のために役に立ちたいことなどを思い思いにスピーチしていました。客席には、その弁士たちが通う日本語学校などの友人たちが応援に詰めかけ、会場は熱気に包まれていました。

参加していたのは、ベラルーシ、エジプト、モンゴル、中国、ウズベキスタン、スリランカ、キルギス、インド、ロシア、ミャンマー、バングラデシュ、ネパールから来た留学生たち。最初に登壇したベラルーシから来た^{チイモツェンコダリア}Tsimashenka Davya さん(横浜デザイン学院)は、かなり緊張した様子。

「永い夢」と題して、「『才能がない』と言われた私は、努力し、夢に出会い、頑張っている」と、14 歳の時に母国で見た日本のアニメーションに感動し、日本に留学する決意を固めた話をして、無事弁論を終わりました。

「『郷に入っては郷に従え』異文化交流のギャップを超える」と題して語った中国出身の^{WangYanxiang}王彦翔さん(東京リバーサイド学園)は、日本の電車やバスの中での優先席の譲り方の難しさを訴えていました。お年寄りに席を譲っても、「私は元気だから譲ってもらう必要はない」という態度を取られてしまい、年寄扱いしたことに反発された経験から、文化の違いで善意が伝わりにくいことを紹介していました。

また、インドから来て「いただきます」と題して語った市川日本語学院の^{パワールビクラントデリップ}Pawar Vikrant Dilip さんは、日本人の友人とラーメンを食べに行き、全部食べ切れずに残したときの話を紹介しました。自分では、たいした意識もなく残したものの、友人からは 1 時間にわたって^{きと}諭されたといいます。

「日本人が食事の前に『いただきます』というのは、食材となる動物や植物の命を頂くことへの感謝だということ。栽培したり、運んだり、調理したりした人たちにもお礼を言わなくてはいけない」との話をされたそうです。インドでも同じような言葉があるものの、こうした感謝を忘れてはいけないということが、「いただきます」という言葉に込められていることに改めて気づかされたそうです。

外務大臣賞を受賞したバングラデシュの^{アハメドタスニム}Tasnim Ahammed さん(東京日本語学院)は、花火大会を見に行った時、みんなが携帯電話で写真や動画を取っており、きれいな花火を直接自分の目で見な

いことに疑問を呈^{てい}し、「一緒にいるけど一緒にいない」という話をしました。普段の生活でも、電子メールや LINE などコミュニケーションを取ることが多いものの、本物を見て、直接対面で会話の方が真意が伝わります。そのことの大切さを諄^{じゆんじゆん}々と説いていました。

最後にマイクの前に立った Rai Asmi^{ライ アスマミ}さんは、佐賀県の弘堂国際学園から参加し、「女性のエンパワメント」について元気よく話しました。母国のネパールでは、20～30 年前には女性は小学校の途中で学校に行かなくなり家事を手伝ったりしていましたが、最近は教育を受ける女性が増えていそうです。重要な地位について活躍する女性も多くなってきたそうですが、「日本では女性首相が誕生していない。女性活躍が増えれば、日本は発展する」とエールを送り、埼玉県知事賞を獲得しました。

1 人ひとりの話は、いずれも気づかなかったことをわかりやすい言葉で紹介し、違った視点を聴衆に気付かせてくれました。このほかの参加者たちも、みな素晴らしい話をし、文部科学大臣賞やさいたま市長賞など、様々な賞が贈られていました。賞を取れなかった人の話も、心に響く演説ばかりでした。

今、「演説」という言葉を使いましたが、多くの人の前で、自分の意見を披^{ひれき}歴する話をするを指しています。英語で speech と言っていたのを、1 万円札に肖像が載っている福澤諭吉が 19 世紀に「演説」と訳しました。福澤は「人が勉学する中で演説は重要だ」と説いて回り、自らが創設した慶應義塾での教育の中で採用し、自分ばかりでなく、学生にかわるがわる演説をさせました。

演説は、自分の考えを整理し、その言葉の力により、自分の思考内容を紹介し、人を説得する力を持ちます。福澤が 3 回にわたって行った欧米訪問では、外国の政治家や学者たちが speech している姿を見て、その影響力に魅入られ、日本の教育に取り入れたのでしょう。東京・三田の慶應義塾大学のキャンパスには、福澤が明治 8 (1875) 年 5 月に建てた演説会堂「三田演説館」があります。開館 2 年前の 1873 年に数人の学生が speech と debate (討論) の研究を始め、翌年には日本初の演説会を開いたといわれています。500 人ほどの聴衆が入れる規模で、約 150 年後の今でも、このホールを使って定期的に演説会が行われています。

慶應以外の大学でも、教育に演説を取り入れ、弁論部や雄弁会^{ゆうべんかい}といった、演説の技術や精神を磨く学生団体を持っている大学は数多くあります。例えば、竹下登、海部俊樹、小淵恵三、森喜朗といった歴代首相は早稲田大学雄弁会の出身です。政治の世界では、有権者の心をつかみ、自らの政策を国民に伝える手段として、演説がいかに重要かということがわかるでしょう。

しかし、諸外国の人たちに比べると、日本人は speech や debate の力が劣^{おと}っているといわれています。19 世紀にこの国に伝わったこれらのコミュニケーション技術がどの程度普及しているかは難しいところです。日本の知的レベルを高めるためにも、演説、弁論の普及は欠かせないでしょう。

そうした中で、日本語を勉強し始めてまだ日が浅い、外国人留学生が参加する日本語による弁論大会は、留学生ばかりでなく、日本の学生にも大いに影響を与えていると思います。

今回の大会は、関東甲信越地区日本語教育機関連絡協議会の主催です。大会が行われた埼玉県では外国人就労者や留学生が多く生活しており、県民 33 人に 1 人は外国人だといわれています。実行委員長の荒木幹光全国日本語学校連合会理事長は、「この大会の開催趣旨は、単に日本語能力の優劣を競うだけにとどまらず、留学生たちの思いをよりの確に知る点にある。彼らがやがては、母国の発展を担う中核となることを考え、21 世紀におけるわが国と世界の善隣友好^{ぜんりんゆうこう}に想いを至らす

とき、彼らの 1 人でも多くが単に知日家^{ち にち か}であることにとどまることなく、親日家となってくれることを願わずにはおられません」というメッセージを出しました。

世界は 3 年余りにわたった新型コロナウイルス感染症の拡大により、多くのコミュニケーションが失われました。もちろん、speech、debate をする機会も大幅に減りました。その中で起きたロシアによるウクライナ侵略、イスラム原理主義組織ハマスによるイスラエル奇襲をきっかけとする戦闘の拡大は、まさに、こうした意思疎通を欠いた結果に引き起こされたものでしょう。この戦いの延長線上で自由民主主義と専制主義の対立がエスカレートし、第 3 次世界大戦が勃発することは避けなければなりません。

他民族の考えを知り、理解することで、こうした諍^{いさか}いが大きくなることを回避できるでしょう。外国人留学生と日本人学生が speech = 演説・弁論の技術をお互いに磨きあい、日本と世界の国々がより友好的で緊密な関係を構築できるきっかけになることを期待せずにはおられません。